

のみ陽性またはすべて陰性でその診断に有用ではなかった。8例は手術で腫瘍が発見されなかつた。全体の手術による治癒率は95.6%であった。

14. Crow-Fukase 症候群の5例

丸岡 伸 山崎 哲郎 間島 一浩
坂本 澄彦 (東北大・放)

Crow-Fukase 症候群は多彩な症状を呈するが、なかでも polyneuropathy, organomegaly, endocrinopathy, M protein, skin change が高率であることから POEMS 症候群とも呼ばれている。稀な疾患であるが欧米に比しわが国に多く、多発性骨髄腫に比して若年に発症し男性に多い。当科で経験した5例の内訳は男性4例女性1例、年齢33-60歳、平均43歳で、主な症状としては末梢神経障害・下腿浮腫・色素沈着・多毛が5例全例に、肝脾腫が4例に、M蛋白・骨髄腫・胸腹水・髄液蛋白増加・うつ血乳頭・耐糖能障害・疣状血管腫・微熱がそれぞれ3例に認められた。骨髄腫を合併した3例のうち硬化型が1例混合型が2例で、いずれも骨シンチで陽性像として検出された。本疾患においては硬化型の骨髄腫を伴うことが多く、骨病変の検索に骨シンチが有用である。

15. 腰椎分離症における^{99m}Tc-MDP SPECT の意義

渡辺 磨 橋本 学 小林 満
佐藤 公彦 戸村 則昭 渡会 二郎
(秋田大・放)

腰椎分離症について、^{99m}Tc-MDP SPECT像と単純X線像、CT像との比較を行い、その意義を検討した。臨床的に分離症と診断された18病巣のうち、SPECTでuptake(+)は13病巣で、uptake(-)は5病巣であった。SPECTでuptake(+)の13病巣のうち、11病巣はいずれもCTで分離間隙の狭い、比較的早期の病巣であった。2例はSPECTでuptake(+)にもかかわらずCTで分離間隙が不明瞭であったが、そのうちの1例は1年後に両側分離へと進行しており、SPECT撮像の時期はきわめて早期の段階であったと考えられた。SPECTでuptake(-)の5病巣は、CTでいずれも分離間隙が広く、陳旧性の病巣と考えられた。^{99m}Tc-MDP SPECTは腰椎分離症の検出に優れ、早期の治療に貢献し得る可能性が考えられた。

16. 肝切除前後における^{99m}Tc-GSA シンチグラフィでの肝予備能評価

望月 孝史 加藤千恵次 志賀 哲
鐘ヶ江香久子 永尾 一彦 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古館 正徳
(北大・核)

肝切除術前後に^{99m}Tc-GSA シンチグラフィを施行した18例をびまん性肝疾患の有無で2群に分け、肝予備能を反映するパラメータの検討をHH15, LHL15, 肝予備能インデックス(HPFI), 肝集積初速度(D0)を行つた。びまん性肝疾患合併群では術前後のHH15, HPFI, D0に有意差を認めたが、びまん性肝疾患非合併群では有意差を認めなかつた。LHL15は、びまん性肝疾患の有無にかかわらず有意差は認めなかつた。びまん性肝疾患合併例の肝切除術後では、肝予備能を反映するパラメータはHH15である可能性が示唆された。

17. サルコイドーシスにおける⁶⁷Ga scan の検討

志賀 哲 望月 孝史 加藤千恵次
鐘ヶ江香久子 永尾 一彦 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古館 正徳
(北大・核)

panda sign と λ sign は sarcoidosis 患者の Ga スキャンにおいて特徴的なサインと言われるが、panda sign の出現頻度は人種により違うとの報告もあり、また、胸部以外の病変への Ga 分布の頻度に関する報告は、少ない。われわれはpanda sign および、λ sign の出現頻度および胸部以外の病変への Ga 分布を調べた。対象は、sarcoidosis 群29名、31スキャン、対照群94名、101スキャン。サルコイドーシスにおけるλサインの sensitivity, specificity は、それぞれ52%, 100%。panda sign を認めた症例はなかった。眼病変、皮膚サルコイドおよび心サルコイドにおける病変への Ga 集積の陽性率は6%, 18%, 0%と低かった。